

IV-94 陰影景観の固有性に関する研究（2）

－現代詩に現れる日本の陰影－

京都大学工学部 正 員 川崎 雅史

京都大学工学部 学生員 梶谷 拓生

京都大学工学部 学生員 ○堀 秀行

1. 研究の目的

前稿の陰影景観の固有性に関する研究(1)では、陰影景観の基本構成とタイプ、および日本的な陰影の一つの典型を整理した。本研究も、日本的な風土に関連する陰影を現代詩から抽出し、前稿で得た景観の構成と陰影に投影された詩人の心象を整理する。

2. 現代詩の分析対象と分析手順

(1) 分析対象の選定；対象となる現代詩は、作品のテーマが明確に記述されていることを考慮し、伊藤による文献¹⁾を用いた。対象詩は明治～昭和初期までの250篇である。

(2) 分析手順

①対象詩の陰影表現のある箇所を抽出する。

表1 基本タイプの出現の割合

①「光どり」	4	シーン(13%) / 30作品
②「影どり」	13	シーン(43%) / 30作品
③「陰」	10	シーン(33%) / 30作品
④「鏡映り」	6	シーン(20%) / 30作品

表2 季節・時間・気候の割合

[時間]	①「夕暮」	16 シーン(53%)
	②「夜」	3 シーン(10%)
	③「昼」	3 シーン(10%)
	④「朝」	1 シーン(3%)
[季節]	①「冬」	9 シーン(30%)
	②「春」	6 シーン(20%)
	③「秋」	4 シーン(13%)
	④「夏」	0 シーン(0%)
[気候]	①「曇り」	3 シーン(10%)
	②「雨」	1 シーン(3%)

②陰影の基本構成である主体，スクリーン，基本タイプ（光どり，影どり，陰，鏡映り），季節・時間に該当する表現を特定し，その頻度を整理する。

③作品評論をもとに，詩のテーマをマクロな視点から分類し，陰影の描写に投影された心象を特定する。

3. 分析結果 ー陰影景観の基本構成ー

250篇中30篇(12%)の現代詩が陰影表現を有し，分析結果を以下に述べる。

①基本タイプの出現割合（表1参照）；影どりと陰がほぼ同じ割合であり，両方で約80%を占める。

②季節・時間・気候（表2参照）；夏は抽出されず，冬が最も多く30%を占める。これは夕暮れの冬の弱い太陽によってできる弱く柔らかな影や陰が，文学者の心象の中で日本的な陰影として存在している。

③主題（テーマ）（表3，表4参照）

テーマを伊藤の評論を参照しマクロに判断すると，希望，生命感などのポジティブなテーマ，個人と社会との葛藤などのネガティブなテーマ，風景描写における自己想念の世界など静的でニュートラルなテーマを扱った

表3 陰影表現に関する現代詩の主題の分類

主題分類	作品数	主 題	
ポジティブな主題 (希望・恋等)	27%(8)	恋・情操(3)，自然の輝き，希望 隠遁生活，季節の訪れ，加護	
ネガティブな主題 (不安・葛藤等)	27%(8)	社会的 葛 藤	経済的貧困・負債(2) 孤独・群衆，別離(帰国)
		個人的 葛 藤	哀しみ・死(2)，青春の暗鬱 絶望・虚無，精神の漂白
ニュートラルな主題 (静的な心象風景等)	47%(14)	心象 風景	追憶・時の移ろい(3)，生活(2) わびしさ・虚無(2)，幽玄情緒(1)
		風景 写実	森林(3)，川，道，田舎

%は30作品中の割合，()内は該当数

作品の3つに分類できる。ニュートラルな主題が非常に多いのが特徴であるが、ここには感情を排除した自己想念の写実を行う詩人の態度が描かれている。基本タイプでは、光どり・鏡映りは、ポジティブな主題に結びつきやすく、ネガティブな主題は、影どりと陰のみが該当した。

④主体とスクリーン（表5、6参照）

主体とスクリーンの全体的な傾向として、山や河川の地形・植物の自然系の景観要素の頻度が非常に高いことわかる。また、スクリーンと比較して、主体では人工系の要素がやや高くなっている。

i) [主体の特徴]；自然系の主体は、まとまった大きな陰影を作る大規模な自然地形、雪や星のような気象現象に伴うまばらな陰影を作る気象現象、花や葉のようにきめ細やかな輪郭を示し、風によって常に微小な変化をする陰影を作る植物、筆が画面を走るような大きな動きを見せる動物などの多様な要素から構成される。人工系の主体は、固定されて連続しており、変化の少ない陰影を作る建築物系と、ゆっくりとした動きをする人間の影が該当している。

ii) [スクリーンの特徴]；固定されていてテクスチャの時間的な変化がそれほど、大きくない自然地形のスクリーンは、道・地面のような目線より下にあるもの、山谷や森のように視界に広がる大規模スケールのもことから構成されており、その占める割合が高い。また、テクスチャの時間的な変化の激しいものとして、水系のスクリーンが見られた。ここでは、鏡映りがほとんどであったが、時間によっては、影どりのタイプにも変化する可能性が残る。人工系は、障子、ガラス、陶器などの生活の中でみられる小さくて移動可能であり、またテクスチャや色彩の多様なスクリーンが該当しているのが特徴である。

参考文献

1)伊藤信吉；現代詩の鑑賞（上・下），新潮文庫，1954 2)小長井由隆・川崎雅史；輪郭線のラフスケッチによる街路景観の基礎的評価，都市計画論文集No.24，pp.44 5-450，1989．

表4 主題と構成タイプ

	光どり	影どり	陰	鏡映り	各 計
ポジティブ	1	3	2	2	8(27%)
ネガティブ	0	6	2	0	8(27%)
ニュートラル	3	4	3	4	14(47%)
各 計	4(13%)	13(43%)	7(23%)	6(20%)	30

表5 現代詩に現れる陰影景観の主体

自然系 50%(15)	地形 20%(6)	山(2)，森，林，河川，地面
	気象 7%(2)	雪，星
	植物 17%(5)	花(3)，樹木，笹の葉
	動物 7%(2)	馬，鳥
人工系 37%(11)	建物 20%(6)	建築(2)，倉(2)，小屋，白壁
	人間 17%(5)	人(4)，仏

%は30作品中の割合、()内は該当数

表6 現代詩に現れる陰影景観のスクリーン

自然系 57%(17)	水系 17%(5)	川面(3)，渚，泉
	地系 37%(11)	道・地面(5)，山(2)，林，谷 荒野，雪
	植物 3%(1)	花
人工系 20%(6)	生活 17%(5)	改札口，障子，戸棚，ガラス 置き写真，陶器
	人間 3%(1)	瞳

%は30作品中の割合、()内は該当数